

# 「運動あそびの課業化」カリキュラム構成に関する研究

女子聖学院短期大学 梅津迪子

## 運動あそび、課業、カリキュラム

### はじめに

1959年の「国連の児童の権利宣言」の中で「児童は遊戯、およびレクリエーションのための十分な機会を与えられる権利を有する。その遊戯、およびレクリエーションは教育と同じような目的に向けなければならない」と規定され、その頃から幼児期のあそびに関する研究も、それぞれの分野で活発になってきた。「あそびを文化全体性のなかでとらえようとする」文化人類学的アプローチ、「あそび現象そのもの」をとらえる現象学的アプローチ、「あそび・そのなかに含まれる諸要素を超えて統合する構造というモデルによってその構造の変換を明確化」しようとする研究等がなされている。

保育の現場では、「あそび」を労働（仕事）、課業（学習）、および人間形成の3者の関連においてとらえられつつある。

今日では幼児期にふさわしい生活体験が得られにくい環境が全体的に広がっているため、幼稚園教育への期待も大きい。

そのなかで、幼稚園教育目標の「幼児の心身の調和のとれた発達を促す」目的も、その指導法については多岐をきわめている。

### 目的

現行の幼稚園教育要領の内容は、領域の理解の仕方とあいまって構造的にとらえにくく「ねらい」と経験、活動の関係や、指導法が理解しにくい。<sup>(1)</sup>

また、保育者の資質や能力についても保育者自身、直接体験や多彩なあそびをあまり経験しないで成人している者の増加も指摘されている。そのような現状の保育現場では、幼児にとって「あそび」の重要性が述べられているにもかかわらず、「あそび」のとらえ方も一様ではない。カリキュラムも「課題」と「課業」といったことばが使用されているが、その区別や違いが明確でなく、それがこどもの側の問題としてとらえられているのか、保育者側としてとらえられているのかといった問題も生じている。

そして、「あそび」も「課題」「課業」と対立させて考えているといった問題点もあり<sup>(2)</sup>、保育者によって一斉に与える教材を「課題活動」としたり、設定したねらいのある活動を「課題活動」とする者など、また、幼児の一人ひとりの発達段階を無視して、保育者が決めた月ごとへの単元や、教材中心の保育がなされているのが現状である。

現実の保育は、幼稚園の教育要領を基準としたカリキュラムに従って指導されており、保育者側から一方的に与えられる方法で実施されている。<sup>(3)</sup> また、カリキュラムに

関する研究も非常に少ない。これは、幼稚園の教育目標、保育観も一様でなく、社会のニーズに応じた園の実状もあると思われる。幼児の生活をとりまく環境因子とその相互影響作用を全体的に、総合的にあるがままにみつめていく視点を大切にしながら、幼児にとって望ましい活動とは何かを追求し、活動の内容と方法を発達に即してカリキュラム構成し現場で実践して行くことが目的である。今回はそのための事前研究である。

### 内容と方法

上記のように、保育現場における問題提起が多様であるにもかかわらず、カリキュラムに関する研究は非常に少ない。

幼稚園教育要領や六領域に対する理解の仕方も困難を極め、園により格差がみられる。

そこで、保育現場における問題点を洗い出す視点として

- ・幼児にとってあそびとは何か
- ・幼児に対する保育者のかかわり方
- ・幼児にとって自発的にあそべる（運動あそび）活動とは何か
- ・年齢と幼児の体の発達の特徴を把握し、

1. 幼児の発達に関するもの（年齢別発達の特徴）
2. 幼児のあそびに関するもの
3. 幼児保育のカリキュラムに関するもの
4. 運動あそびに関するもの（特に調整能力の研究に重点をおき、縦断研究によるものを主とする）
5. 課業に関するもの

の5つに分類し、関連研究文献の検討を試みた。

## 1. あそびの構造と機能

### 1. あそびとは

従来、あそびに関して多くの理論が試みられてきたが、あそびは子どもの全体的発達、全面的人間形成とのかわりにおいてとらえられている。

あそびをあそぶ側の立場から全体性においてとらえようとしたのはホイジンガーであり「人が自ら感じとってそのままに遊びを一つの“衝撃状態”から何かぐいと感動につかまれて揺るがされた状態」としてとらえている。

K. グルースは「実践以前」であって単なる実践ではない。「あそびは基本的には単なる機能的同化、あるいは再生的同化である」と述べながらも、あそびのなかに成長（思考の成長と活動の成長）の現象をみとめ、芸術との関連

におけるあそびに興味づけている。

ピアジェは「あそびそれ自体で行動ではなく、純粹に自発的だといわれるもので、たのしさを伴い、組織的に指導されるものではないとし<sup>(4)</sup>」、民族学でとりあげられる「あそび」は大人が教えたりするものでなく、子どもたちの間で伝承され、自主的に行われている活動を意味しているが、幼児にとってあそびは、自発的にその行為の中に没頭している状態であり、そのあそびを媒介として発達があり生きることを学ぶ基礎となるものである。

そこには無意識のなかに幼児自身の自己目標があり、幼児自身の文化とかがわっているものであろう。

大人はすでに出来あがった能力を使って遊ぶが、幼児は現在発達しつつある全機能を使ってあそび、その際意志が直接はたらき、特定の行動があそびの中で繰り返される。それとともにその行動が環状と結びつきその行動を通して共感したり、知的関心を目覚めさせたり思考を獲得していく。そしてあらゆる可能性（行動）の中で確かめようとする。

それは「何かをやってみる」（自己課題）という喜び、たのしさが幼児のあそびであり、またあそびが幼児の興味や欲求、精神発達のバロメータでもある。

## 2. あそびの構造

図1は<sup>(5)</sup>、<sup>(6)</sup>、<sup>(7)</sup>、<sup>(8)</sup>、<sup>(9)</sup>、<sup>(10)</sup>、<sup>(11)</sup>、<sup>(17)</sup>、<sup>(29)</sup>を参考に幼児の発育発達とあそびとの関係、変容を図にしたものであるが、あそびは幼児自身の文化との関わりと発達段階に即して活動内容が変化してくる。

社会環境、都市空間の変化は、子どものあそび場と活動範囲の縮小化を招き、幼児をとりまく生活の場は生産活動の接点が失われ<sup>(11)</sup>、文明の発達にともなった生活様式リズムの変化は、幼児のごっこあそび、模倣行動を表面的なものにしてしまっている。

玩具や遊具面においても、思考と表象あそびの展開の場を奪い、あそび活動をつくり出す基礎技能の欠如を招いている。

現代社会は情報化社会となり、ことば、特に文字、数字によって伝達され保存される情報が多くなり、情報を記憶したり、それを組みかえたりすることも要求されている。当然、人とのかわりも減少していくことになるであろう。

幼児期は生活を豊かにふくらませ、情操を養い、感覚（触覚、味覚、聴覚、臭覚、視覚）を育て、将来生活をしていくための基礎を養う土台となる場であるから、一人ひとりの年齢に即した発達過程をみきわめ、個人差を考慮するとともに、その能力をのびするための諸々の要因を組み合わせ、幼児の体験の場をできるだけ多くもたせることが望ましい。

それは、ことば中心でなく身体活動をともなった感覚的手段を多く用いた活動がなされることがよいと思われる。その感覚運動技能を獲得することによって独立心と外界に対する適応能力を発達させていくことになり、くり返すことによって興味（意志）－感情・行動－共感、反感－思考

と移行していく。<sup>(5)</sup>

その過程で、仲間とかかわりながらはじめの活動（動き）が次の活動（動き）へ自然に流れていくように、あそびの内容を構造化し、系統化して行わせることも必要であろう。<sup>(6)</sup>しかし、保育現場で実際行われている活動の順位は1位基本的生活習慣、2位ことばのしつけ、3位運動あそびの順に力を入れている。あそびもごっこ、ゲーム、集団、リズムあそび等に力を入れているのではなく、運動あそびに重点が置かれている。

しかし、運動あそびも専門家による指導（58%）であり、内容は水泳指導、体育指導である。<sup>(12)</sup>

## 3. あそびの機能

2でも述べたように、あそびはことば中心でなく、特に身体活動をともなう活動がなされることが望ましく、経験、修練、体得に結びついていくもので、あそびを通じて得た諸能力は成人してからの生活準備ともいえる。

年齢に即した運動あそびを経験することやなわとび、まりつきのように繰り返すことによって技能が確保され運動能力は高めらる。しかし、技能は段階的、系統的に進歩するというより、総合的、時間的、空間的に形づくられながら与えられていくものである。<sup>(6)</sup>

3歳児の心身の発達の姿は、生活経験が広がり他との区別ができるようになり、自分のからだがかかなり自由に使えるようなる。そして、自分の気持ちや意志を言語で相手に伝えられるようになり、自分の身のまわりの始末、基本的生活習慣の自立が整ってくる時期である。

しかし、上記した社会環境や、家庭の教育機能の低下は幼児のみならず、若者社会の中（身のまわりの始末＝基本的生活習慣の自立→一人前になるための条件）まで継続される傾向にある。

自立生活確立のための習慣づけも、家庭以外の集団の場に於て他者との関わりの中で、現在の社会環境に適應していくものとしてとらえ直し身につけさせなければならないであろう。

生活様式の変化は、日常生活の中でしゃがむ、座る、ふく、こする、しっかりと握る、スイッチをまわす、はさむ、ひねる、しぼるという手指を使う場を喪失させ、行動も指1本（ワンタッチ）で足りるようになり、足首、脚力を使う場面も少なくなってきた。

そして、住居形態もマンション構造は、上下階への遠慮からとぶ、とびおり、走るなど基礎活動も制限せざるを得ない。

歩行が一応完成すると走運動が開始され、自由に方向を変えたり、止まったり、速度も増してくるようになる。

特に3歳児の発達の特徴は跳躍運動であり、椅子の上や、階段からとびおりたりするが、とびおりの時の決断などによって意志を練り、脚や腰の弾力を増し空間姿勢や着地からだのバランスをとる能力を高めることができる。

勿論、個人差はあるが片足とび（ケンケン）もできるよ

うになり、固定遊具を利用してとんだり、つかんだり、握ったり、はさんだり、自分のからだのバランスをとる経験をさせることが望ましい。(10)

3歳児は、あそびの変容が多少みられるが、あそびが深まるよりも広がる程度であり、傍観的行動も多々ある。これは、自分ではしていないが興味あるものを観ている行動であり、その後自分からそのあそびへ移行するための行動である。(11)

「調整力を高めるために、発達に即してどんな遊びがよいのか」運動能力テスト、体力テストとを通じて調査結果が報告されているが、一般に平衡感覚、体支持持続時間の低下が報告されている。(8)

また、調整力を高めるための運動遊びの年間カリキュラムによる指導と、協応性、平衡性テスト(情緒の安定性、表現能力の発達、言語理解、動作の敏捷性、運動あそびを

好きか)の結果、それらの能力(目と手の協応、平衡性、リズム)が欠けている幼児は、親の子どもに対する接し方や家庭環境にもあらわれており、幼児自身も甘やかされている子、言語表現がうまく出来ない、社会性が未発達の子にみられると報告している。(9)

しかし、保育者がその背景や原因を把握し、その個人差に応じた適切な配慮、例えば、遊具、ことばかけ、その本人に自身をもたせるあそびを経験させること、家庭との連携等を仲間とのかかわりの中で行っている。

4歳児においては、聞いたり、話したり伝達が豊かになり、友だちとのつながりも強くなり、自分の方から積極的に他人や物とかかわっていくようになる。そして、身のこなしが器用になり、集団の中でも想像的活動が豊かになってくる時期である。

この頃から親の養育態度、家庭環境、地域社会の影響、

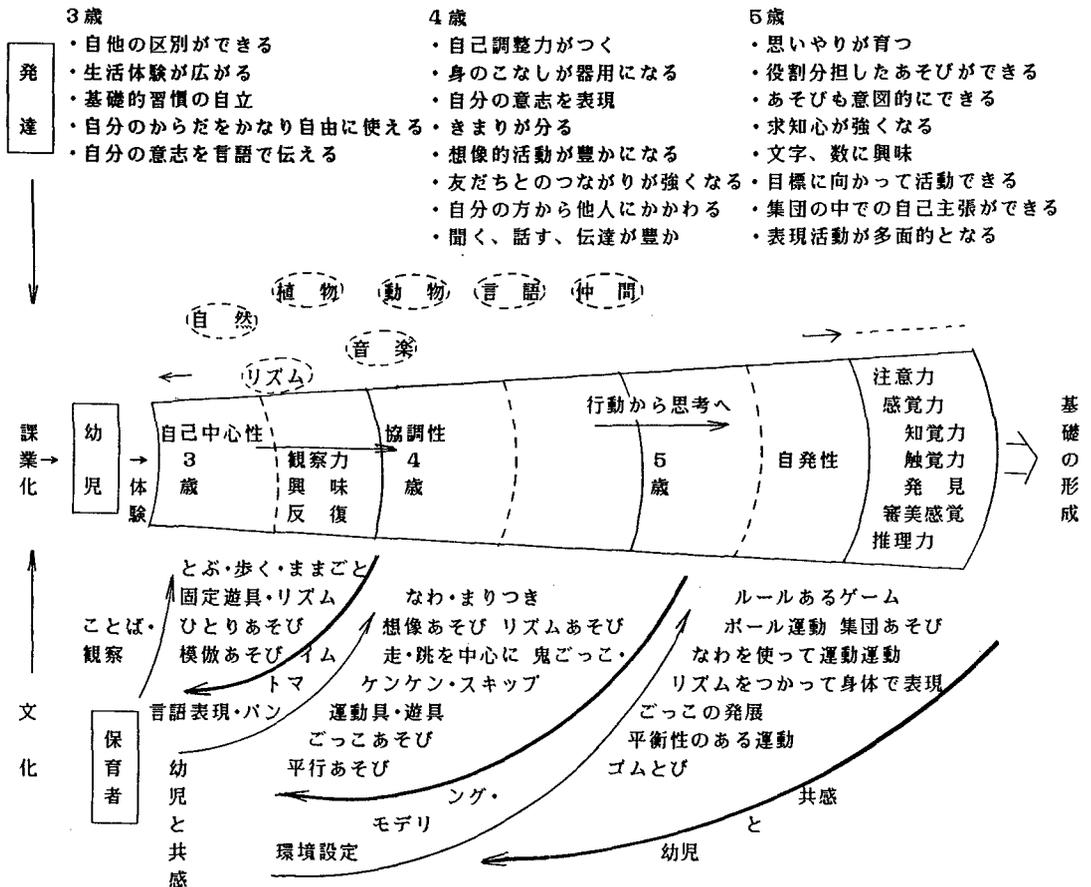


図1 幼児の発育発達とあそびの変容

おけいごとへの参加、住居形態、兄弟の有無など諸々の条件や働きかけによって個人差がみられるようになる。<sup>(1)</sup>

<sup>(4)</sup> 4歳児は大筋運動が中心で、それぞれの運動機能の分化独立が現れ、走、跳、投、懸垂、前回り、平均運動などが積極的に練習され、次の運動へ発展する準備となる。

模倣あそび、ごっこあそびも、1人あそびから仲間とかかわりながら平行あそびへと移行し、あそびのなかで想像したり、みたり、つもりになったりしながら表象あそびへと発展していく。<sup>(25)</sup>

運動あそびにおいては、4歳児は特定の運動経験でなく、いずれの運動も調整力の伸長に寄与するようであるが<sup>(9)</sup>、走、跳、投を中心にボールを使ったり、ルールのあるあそび、遊具を用いた運動あそび（なわ、まり、フープ、棒）スキップ、リズム感のある動き、固定遊具もすべり台の活用が一番多く、二、三輪車のりもの等<sup>(19)</sup>が望ましい。

そのためには、保育者は、各個人の過程や男女差を把握し、遊具、用具の準備、幼児自らやってみたくするような雰囲気、環境づくりの設定、ルールの工夫等の配慮が必要である。

5歳児の発達は、あそびも意図的にできるようになり、集団の中で自己主張をしたり、幼い子への思いやりも出来る役割分担したあそびも出来るようになる。当然、いろいろなことに興味を持ち求知心が強くなり表現活動も活発になる。そして、文字や数にも興味を抱き、何か目標に向かって活動もできる。

既成の玩具の世界に変化があることは述べたが、玩具の機能もより高度、高価なものとなりファミコンに夢中になる子の出現も報告されている。逆に玩具には扱いきれないほどの物もあり、大人の手伝いを必要としたり、あそび活動が受け手になって、指示されなければあそべない子もいる。保育現場でも一斉形態指導がなされている所が多いため<sup>(3)</sup> 指導されなければ駄目な幼児、活動を考える場を与えられない状況も生じている。

特にこの時期は、複雑で高度な巧微的運動を獲得することができ、それまでの運動機能間の不調和は次第に小筋の働く動作間の協調をはじめ、均衡や統一ある運動能力へと発達する。

ボールを投げても受けることができなかつた幼児は手指感覚と他の機能の協応動作が巧みになりキャッチボールが出来るようになる。

いずれの調査結果<sup>(8)</sup>、<sup>(9)</sup>、<sup>(15)</sup>、<sup>(29)</sup>でも、ボール運動に発達の段階パターンがみられたとし、5歳児において、調整力の伸長への運動効率、ボール運動群が最大であったことを報告している。幼児期は神経系統が一番早く発達する時期であるが、体のバランスをとる平衡性は年長になるにしたがい個人差が大きくなり、4歳児でみられなかつた平衡性のトレーニング効果も5歳児になるとあらわれるようになる。<sup>(17)</sup>

しかし、一方で運動あそびにも性差はみられ<sup>(26)</sup>、<sup>(27)</sup> 男児においては、二、三輪車、ボールけり、野球、フット

ベースボール、鬼あそびといった全身を用いる激しい移動運動や、ゲームに興味をもつ傾向にあり、女兒ではブランコ、鉄棒、バレーボールあそび、なわとび等の広範囲の移動を伴わない運動遊びを好む傾向がみられる。<sup>(9)</sup>、<sup>(15)</sup>

## II. あそびの課業化

### 1) 課業化とは

「課業」ということはソビエトが起源のようである。ソビエトの「乳幼児教育プログラム」一年間カリキュラムと各領域の活動一の中でカリキュラム領域を「あそび」「課業」「労働」「日常生活」に分けている。

そして、「あそび」は感覚教育、認識過程を発達させるために用いており、朝と夕方、散歩の時間に1日1～2回以上を全員、またはグループで行わせている。

「課業」は教科活動の基本的形態としてとらえており、「課業」での学習を通じて一定量の知識と技能の習得を目的としており、発達段階に応じて内容は変化するが、ことばの発達と外界の認識のための課業、描画、粘土工作、組立、音楽、体育となっており、大体時間は1回15分～20分である。

「課業」としての活動は、知的な緊張を要する課業と、動きをとまなう課業とを交互に行い、時間は1回15分～20分、毎週1回～15回行うとしている。

課業の内容は、大人の文化の伝達に重点がおかれ、年長になるにしたがい高度な内容になっていく。<sup>(16)</sup>

しかし、我国では小学校で行う「教科」とは異なるが、保育者の側から意図的に計画された学習活動という性格においては、小学校の教科活動と結びつくものとして「課業」ととらえている。<sup>(29)</sup>

それは、明らかにあそび活動や、園における日常性の生活指導とは性格を異にするものであり、「課業」と「あそび」との関係は、小学校でいえば教科と教科以外の関係に類似している。つまり「課業」—園—教科、「あそび」—家庭—教科外といった関係が成り立つだろう。<sup>(6)</sup>

一般に「課業」の概念は、保育者の指導性の強いことばとしてとらえられているが、本来「あそび」活動においては、直接保育者側の働きかけや、指導はなされていない。

それだけ幼児自身の自主性にまかされていることになるが、この「あそび」活動の中でねらいとするもの。

1人ひとりの発達に即した活動を自主的にさせるにはどのような活動がよいのか。

それはどんな内容、方法、準備をすればよいのか。雰囲気、遊具、ことばかけ等を通じて年齢にふさわしい時期、材料を選択し、「課業」として組織、体系化していく、その流れを保育者自身が、頭の中で十分理解していることである。

一方、幼児の側から、幼児の発達課題からみて望ましい経験をさせること、その経験がまとまった体系を整えていく過程の中で思考され、望ましい活動に向けて努力することを「課業化」としている。

ゆえに、保育現場においては、「あそび」を「課業」との関連において、幼児の側から「あそび」そのものを見直すことが問題となっているのである。

## 2) 課業化の条件

- ① 基礎的習慣づけ
- ② 発達過程の開発
- ③ 文化的伝達
- ④ 個性の伸長

人間が成長していく過程の中で基礎となるものは基本的生活の自立である。村田は就学前教育における保育効果を巡って問題行動の多い子どもを親の養育意識や行動との関係から述べているが<sup>(18)</sup>、それは親が家庭で習慣づけなければならず集団の場での習慣づけは保育者によるモデリングでなければならない。

4つの条件は、保育者側に課せられた条件であり、保育者の資質、子ども親、子どもの心理、身体的発達の特徴の理解、保育者自身の文化とのかかわり方、豊かな心、子どもの実態をよく知る必要性、「あそび」に対するとりくみ等、保育者の人間性が影響を与えやすい立場であるだけに多くの問題を抱えていることにもなる。

保育現場では、若い保育者が多く、幼児期に「あそび」を経験しないで成長した者もあり、幼児の実態を知ること、理解することにおいても価値観の相違や、とらえ方が多様である。

②は、ハヴィガーストが「発達課題」の内容を決めるにあたり、子どもの身体の成熟に関する生物的要因、子どもの自我、興味、個人の価値観、精神的発達などの心理学的要因、子どもの生活する文化や社会から要請される文化的社会的要因から9つの発達課題を述べている。<sup>(19)</sup>

幼児保育においては、一番重要な点である。幼児の年齢と発達の程度をよく把握しておかなければ、幼児の活動のねらいとするものや、活動と発達の関係、内容の選択、方法を思考することはできない。当然、カリキュラムの構成にかかわってくる問題であり、その発達段階も、その背景にある社会的要因や文化とのかかわりのなかで考慮されなければならない。

③は、運動あそびの具体的な内容ばかりでなく、行事のあり方、伝承あそびの伝達方法も含め、感覚を養うための配慮がなされなければならない。保育者自身が生活の中でどのように文化とのかかわっているのか、幼児と共感することが出来るか、共有体験をもてるかにかかわってくる。四季の移り変わりに伴って自然を楽しみながら感時記的なあそびに触れさせることも、文化の伝達者として必要である。保育現場では、多くの行事がカリキュラム構成の中心であるため、行事に追われがちであり、経験主義的発想によって行われている傾向にあり、行事の持つ意味、本来の意義も十分に検討されるべきであろう。<sup>(20)、(21)</sup>

④は、画一化された指導法ではなく、日常の保育場面でその子の発達段階をふまえ、原因となるものを追求し、実

態を把握した上で各個人にふさわしい方法で個性を伸ばしてあげることが大切である。

4つの条件を関連づけながら、幼児が自発的にかかわれるような環境の構成をするとともに、保育者自身も幼児との信頼関係を十分築いて、幼児の心に触れ、その発達や興味、関心の芽生えを発見し育てること。そして、幼児がなにかに興味を持ち、なにかに向かう態度が身についているというためには、幼児がいつもなにかに関連する行動を起こすことがなければならない。

幼児をそうした状態に導くためには、図1のように発達と文化を真中でドッキングさせ、その中で問題（提起されたもの）を解決するためにはどのような活動で、どんな内容で、方法で課業化すればよいかをカリキュラムメーキングすることである。

## おわりに

幼児保育におけるカリキュラムは、保育の社会的機能と関連している。<sup>(22)</sup>

幼児をとりまく環境などの変化に対応した幼稚園教育について提言<sup>(1)、(18)、(12)</sup>がなされ実態調査もおこなわれている。<sup>(3)</sup>

それだけ社会が寛容しているといっても過言でなく、核家族化は、子どもの育児と教育が親だけによって行われるということでもあり、親の成熟性と自立も求められているのである。そして年々少子傾向になるにつれて、幼児に対する保護者の期待の加熱化と、幼稚園経営の困難さから本来の幼稚園教育のあり方からみて適切とはいえない教育が行われているのも事実である。

カリキュラムに関するアンケート調査結果でも<sup>(3)</sup>、保育目標、保育形態、カリキュラム作成上の方法等も園による格差が激しい。保育目標も具体性においてはかなりのばらつきがみられ、「自然や仲間とのふれあいの中で思いやり、感謝する心、豊かな人間性（思いやりのある子）を育てる」ことを目標とした園は少なく、「健康で明るい子、物事に耐えてがんばる子、思いやりがあり協力できる子」を目標とした園では、目標が保育者の望む幼児像と重なっている。

また、宗教的色彩を色濃く出す傾向もみられ、幼児保育の内容、方法に関しても混乱がみられる。調査結果では、どの年齢、時期においても同一の指導形態、方法が取られ、発達に即した配慮が十分でない。現場における保育者の幼児の発達の実態把握不足や幼児理解の面でも、保育者が若年に偏っている事実、経験不足からくる困難さが指摘されよう。

保育現場における「何を意図して、どのような教育が行われるのか」ということが理解されるためには、①現在の幼稚園教育要領の改善を図る必要があると考えられる。それは、幼児の主体的な生活を中心に展開され、そのため環境構成を手がけ、幼児一人ひとりの発達特性、及び個人差に応じるものであること、幼児保育はあそびを通し

ての総合的指導により行われるものであること等、基本的な共通理解は十分になされなければならない。

幼児をとりまく環境の変容とともに失われた幼児の文化としてのあそび、つまりあそび心もとりもどさねばならず、自然の流れの中で、②あそびを通じて、生活体験として心や体で感じるものを体験させることが、将来レクリエーション活動（生の充実を生む）につながるための心の栄養素となるものではないだろうか。

③保育者側も「あそび」をどのようにとらえるか、幼児をみる確かな目と耳を養うためには、自分自身の生活に老いても豊かな文化に触れなければならない。それには、あそびや余暇に費やす「時間」に対する価値の見方を変えていくことである。「自分にとって、どれだけ充実した時がもてたのか」ということがこれからの余暇時間や、そこでの行動の価値基準として重要になるのである。<sup>(24)</sup>それを積極的に認めていくことが、生活や文化を豊にすることにつながり、幼児と共感し、共有体験の場を持てることにもなるのである。

④平衡性、体支持持続時間の低下の背景にある問題点を洗い出し、発達に即した運動あそびのカリキュラムメイキングを幼児の視点からとらえ直すこと。

以上の問題を踏まえながら、現場における幼児の実態を観察すること。また保育者と話しあいながら幼児にとって望ましい活動を実践するためのカリキュラム構成の研究につなげていくことが今後の課題である。

#### <文献>

- 1) 保育研究7巻4号 幼稚園教育要領に関する調査研究者会議の報告「幼稚園教育の在り方について」をめぐって 建帛社1986 P38~41
- 2) 保育研究7巻4号<座談会>「課題」について考える 建帛社1986 P6~20
- 3) 保育研究6巻3号<特集>カリキュラムと保育 民秋言「保育カリキュラムについてのアンケート調査報告」 建帛社1985 P24~31
- 4) J. ピアジェ/大伴茂訳「遊びの心理学」 黎明書房1975第13刷 P46,122,124,129
- 5) E. Mグルネリウス/高橋巖、弘子訳「シュタイナー幼稚園と幼児教育」ルドルフ・シュタイナー研究所1979 P24,25
- 6) 浅田隆夫「序説発達教育学」 岩崎学術出版 1987第4刷 P86,116
- 7) 千羽清代子、近藤千恵子「幼児の発達と園生活」—家庭との連携の中で— 教育出版 1981 P3~7
- 8) 近藤充夫他「幼児の運動能力」1986年と1973年の調査との比較保育学会1987 体育の科学 Vol136,37
- 9) 奈良女子大学文学部附属幼稚園「調整力を高める運動あそび」 幼年教育研究部会 ひとりのくに 1979 P60,61,115~134
- 10) 京都教育大学教育学部教育研究所幼児教育研究部 研究部報「運動の調整力を育てるための教育過程の改善と指導法の開発」(1)1980 P181~194、続1981 P197~221
- 11) 小川博久他「子どもの権利と幼児教育」 川島書店1979第4刷 P86,116
- 12) 小杉洋子他「幼稚園の教育内容に関する調査研究」 聖徳短期大学紀要 1985 18号 P313~323
- 13) 中田カヨ子、岡崎比佐子「自由あそび」に関する研究 VII 東京成徳短期大学紀要1984 17号 P81~97
- 14) 古賀範雄「幼児の遊びに及ぼす生活環境の影響」—住居形態、きょうだい数の観点から— 中村学園紀要1987 No19 P51~57
- 15) 増田隆、白木静枝「幼児の基礎的運動技能に関する研究」—投げ、蹴る動作の分析を通して— 中村学園紀要1987 No19 P65~74
- 16) ロシア共和国教育省就学教育編「乳幼児プログラム」—年間カリキュラムと各領域の活動— 黎明書房1972 P18~25
- 17) 加藤埴三「幼稚園と小学校教育の関連」現状と今後のあり方 ひとりのくに1973 P152~165
- 18) 村田正次「幼児期の問題行動と就学前教育に関する研究」(その2)—いわゆる“保育効果”をめぐって— 芦屋大学論叢1978 P69~88
- 19) ハヴィ・ガースト/荘司雅子訳「人間の発達課題と教育」 牧書店1958 P21~24
- 20) 岩崎三千子「幼稚園の行事についての研究」 江南女子短期大学紀要1974 P33~43
- 21) 相馬和子「保育と行事」(1)—保育場面における行事をとらえて— 淑徳短期大学紀要1982 21号 P35~41
- 22) ユネスコ調査「就学前教育の世界的動向」 同文書院1977 P64~67
- 23) 「発達」特集—大事に育てたい子どもの遊び— ミネルヴァ書房1983 P15
- 24) 品田龍吉「体育における“遊び”を考える」 体育科教育1986 2 P18~20
- 25) ガーヴェイ/高橋たまき訳「ごっこの構造」 サイエンス社1980 P82~90
- 26) 神山美代子、山城真紀子「沖縄における子どもの遊びに関する一考察」 幼稚園児(5、6歳)を対象として 沖縄キリスト教短期大学紀要第15号1986 P54~
- 27) 菱谷信子「子どもの遊びとその親の幼児期の遊びについて」 精華女子短期大学紀要XIII1985 P45~52
- 28) 保育研究7巻4号 児嶋雅典「課題をどうとらえるか」 建帛社1986 P30~39
- 29) 末利博「幼児の調整力の伸長を促進する運動内容に関する実験的研究」 関西外語大学研究論集33号 P387~396